





  
 双生児研究会 ニュースレター
   
 《第 10 号》
   
 Newsletter of the
   
 Japan Society for Twin Studies
   
 1991年12月15日発行
   



 目次
 

双生児研究会第5回学術講演会抄録集…………… 2  
 第8回国際人類遺伝学会での双生児関連演題…………… 9  
 双生児研究会第6回学術講演会開催のお知らせ……………11  
     ※ 平成4年1月25日(土)午後1時-5時30分  
     ※ 於：東京大学山上会館大会議室  
 双生児研究会第6回学術講演会抄録集……………14  
 第7回国際双生児研究会議のお知らせ……………19  
 関西ふたご研究会平成4年第1回集会のお知らせ……………20  
 編集後記……………20
   



 会員募集のお知らせ
 

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(東京 9-185311)、加入者名(双生児研究会)をご記入の上、年会費(3000円)をご送金下さい。また、通信欄に所属、所属の住所・電話番号・FAX番号等をお書き添え下さい。

〒409-38 山梨県中巨摩郡玉穂町下河東1110番地  
 山梨医科大学保健学Ⅱ講座

電話 0552-73-1111 (内線2300)

0552-73-6729 (直通)

FAX 0552-73-7882

# 双生児研究会第5回学術講演会 抄録集

日時：1991年1月19日（土）13:00～17:10

場所：東京医科大学病院

## < 一般演題 >

### 演題1～4 青年期の双生児の人格形成についての研究

詫摩武俊，佐藤達哉，山上亮子（東京都立大・人文・心理）

永井好弘，蛙田かほり，阿久津勝利，天野洋子，平野和由，村石幸正，

古谷昌子（東大・教育・附属中・高）

天羽幸子（ツインマザースクラブ）他

#### ★ 演題1 双生児意識について

天羽幸子（ツインマザースクラブ）他

東大附属に在学する双生児を対象に，双生児が相手に対して抱いている感情や意識を双生児意識（<双>意識と略す）と名付けて，中学1年より高校3年までの発達的变化を調べ，この意識の高低と母親の取扱い方との関連を調査した。

1962年の三木安正他による同様な調査結果との比較を行った結果，全般的には大きな傾向の違いは認められなかった。①<双>意識には学年差による発達的变化は認められない。学年差より同一学年での対間の差が著しい。②<双>意識は男子より女子に高く特に相手に対する情緒的結び付きの面に認められる。③母親が2人を同じように扱っている双生児の<双>意識は高く，このような関連は女子の方に強くみられる。④<双>意識の対間の相関は二卵性にくらべ一卵性のほうが高い。⑤一卵性の<双>意識は一般的に高く，特に双生児に対する評価について肯定的である。

#### ★ 演題2 双生児の対人関係の発達

蛙田かほり（東大・教育・附属中・高）他

本研究は，双生児が，父母，きょうだい，友人などの対人関係をどのように形成

しようとしているか、又、一般児との違いはどのようなものかなどを探ろうとするものである。「高校卒業後の進路を決めるとき」等の八つの場面について、相談相手に誰を選ぶかをたずね、その傾向を一般児のきょうだいのグループと比較してみた。また、1964年の先行研究（「双生児による人格形成の研究Ⅱ」三木安正）の結果と比較検討した。調査の時期は1990年10月、対象は東大附属中学一年から高校三年までの全員である。

結果として次のような点がわかった。

- 1 全般的に、相談相手を選ぶ割合が減少してきている。
- 2 学年の進行に伴って相談相手が、“親→友人→相談相手なし”のように変化している。
- 3 女子の双生児は男子の双生児とは異なり、依存的な対人関係の傾向が強い。

### ★ 演題3 母親からみた双生児意識と反抗期

佐藤達哉（東京都立大・人文・心理）他

幼児期と現在の2時点において、①“2人の中はよいか”、②“双生児であることについてどう思っているか”、③“どちらかがリーダーシップをとっているか”、④“性格が似ているか”について尋ねた。③リーダーシップ（現在）に関しては、殆ど同じが50%ほど、少し差があるのが40%ほどであった。④性格については“少し違う”が40%、“かなり違う”が50%となっている。④以外では卵性による違いは認められなかった。母親の評定と本人たちの双生児意識得点をかけあわせてみたところ、④性格は似ていると評価された方が双生児意識は高いが、③でどちらかがリーダーシップをとっているほうがとっていないペアよりも双生児意識は高い、などの結果が得られた。

反抗期について母親に尋ねた結果によれば、2人とも反抗期があったペアが50%ほど、片方だけあったペアが20%ほどであった。前者について時期の一致を見たところ、一卵性のペアでのみ時期の一致が高かった。

### ★ 演題4 双生児にみられる対人不安傾向について

山上亮子（東京都立大・人文・心理）他

「social anxiety」は、対人場面において特有に生じる不安感や緊張感をさす

概念である。「対人不安」は、その訳語の一つであるが、その研究には、大きく分けて2つの側面がある。1つは対人不安を情緒的反応と見なし、それを喚起させる先行要因や、メカニズムについて検討するやり方、もう1つは対人不安の喚起されやすいパーソナリティについて、その個人差がどこから生じるのかを、検討する方法である。

今回は、この第2の側面、個人差についての調査のため、東大附属中学、及び高校の生徒679名（双生児は157名）と、双生児の母親64名に対して、質問紙による調査を行った。Learyの対人不安スケールから8問を抜粋して調査したところ、双生児間での得点の相関に、一卵性と二卵性とで、明らかな差異が認められた。

★ 演題5 アンケートにみる双子の母親の心理的側面  
——「双子の母親の会」ネットワーク作りに向けて——

又吉国雄，吉田啓治（東京医大・産婦人科）

妊婦は「出産」への大きな期待を抱く反面、不安にも絶えずつきまといられている。これが双児妊娠となると、早産や分娩様式、さらに育児や経済的な負担といった単児とは異なる種々の精神的動揺に直面する。これらの不安に対し、我々は外来治療での個々のカウンセリングや、病棟での24時間体制の電話相談などで対処しているが、これ程妊娠や育児の情報が氾濫していても、双児妊婦でのアドバイスとなるものは殆ど見あたらない現在、妊婦相互の情報交換や体験者からのアドバイスは、妊婦自身の不安を解消するための重要な一助となるといえよう。

今回我々は、双児妊婦が相互に情報を交換し、悩みを相談する場を提供すべく、双児妊婦が、妊娠中あるいは出産後にどのような悩みをかかえているか、さらに医療担当者にどのような点を求めているかを調査したので報告する。

★ 演題6 双子老人の寿命および老化度の比較

早川和生，清水忠彦，大城治，由良晶子（近畿大・医・公衆衛生）

大場康寛（近畿大・医・臨床病理）

富岡茂（近畿大・医・中央検査）

金森雅夫（国立公衆衛生院）

かねてより中高年齢双生児910組を対象に追跡健康調査を続けているが、近年、死

亡脱落例も徐々に増えてきつつある。これら双生児を対象に、身体的老化度（白髪化、脱毛化および閉経）、死亡年齢、死因などについて予備的に集計した結果を報告する。死亡者152名の平均死亡年齢は、一卵性（男性 $60.9 \pm 9.9$ 、女性 $66.1 \pm 7.9$ ）、二卵性（男性 $64.5 \pm 11.4$ 、女性 $63.1 \pm 7.4$ ）であった。ペアの両方が死亡した一卵性14組における死亡年齢差は $5.9 \pm 5.3$ であった。死亡年齢、死亡疾患とも一致した例もみられた。生存例についてみると、老眼鏡の使用開始年齢は両卵性ともペア内の平均差3.9年であった。閉経年齢の女性一卵性ペアにおけるペア内差は平均2.7年であった。頭髮の白髪化、脱毛化などの程度については一卵性ペアできわめて近似する傾向がみられた。

#### ★ 演題7 双生児出産と被虐待児の要因

赤松 洋、川上 義（日本赤十字社医療センター新生児未熟児科）

双生児出産によって被虐待児が有意に増加することや、被虐待児の中に双生児の頻度が高いことが報告されている。そこで、今回は双生児出産が家族に被虐待をもたらす可能性ある要因の幾つかを集計して報告した。

1976～1989年の14年間に当センター産科の出産数41,115例の内の374組(0.91%)の双生児を対象したが、1児のみが死産または新生児死亡（乳児死亡も含む）であったのは28例(3.7%)に認められ、2児とも生存退院した334組には1児のみ低出生体重であったのが87組(26.0%)、両児間の出生体重差25%以上（1児の体重が2,000g未満のみ）が21組(6.3%)および1児のみ脳障害あるいは疾病異常をもったのが16組(4.8%)含まれ、今回の双生児出産によって、4名以上のきょうだいをもつ家族が34家族(10.2%)あり、双生児出産によって多人数の家族となる機会が多くなるなどの双生児虐待要因の存在が特徴的に示された。

#### ★ 演題8 双胎で切迫早産入院加療後の選択的分娩誘導にて懸鉤が発生した例としなかった例

内野鴻一（大森赤十字病院・産婦人科）

前田光土、田中政信、平川舜、百瀬和夫（東邦大・医・第一産婦人科）

2例とも切迫早産にて入院加療後の頭位一頭位型双胎妊娠である。妊娠37週にて第1児がSt+2、子宮口開大2cmであったため、選択分娩誘導を行った。

1例は分娩第2期遷延(2時間)に懸鉤と診断,第1児が急性仮死から体内死亡に至り,第2児は緊急帝王切開にて救命した。

他の1例は体外授精により妊娠した双児で誘導前のグットマン撮影法により,第1児の児頭は仙骨側で第2児の児頭は恥骨側にあることを確認し,選択的分娩誘導を行い,両児とも安全に経腔分娩できた。

したがって,双胎の第1児の児頭が骨盤内深く下降していても懸鉤発生が存在し,その予知が重要であることを再確認したので報告する。

#### ★ 演題9 不妊内分泌治療の発展にともなう双胎妊娠頻度の変化について

大谷嘉明,宇津正二,岡田久,鳥居祐一,成田喜代司,青木智  
(聖隷浜松病院・産婦人科)

体外授精・胚移植をはじめとする不妊内分泌治療の発展・一般化に伴い多胎妊娠の頻度が急増している。当院における,双胎妊娠と排卵誘発法との関係について,過去6年間において検討した。それによると総数(自然妊娠・clomiphen・hmg)(組)は,1985年が18(16・2・0),1986年が22(19・2・1),1987年が17(16・0・1),1988年が23(17・1・4),1989年が33(19・5・5),1990年10月31日まで15(10・1・4)となり,双胎妊娠にしめる排卵誘発例の増加が著明であった。また1988年以降9組のsupertwinがあり,いずれも不妊症治療によるものであった。

#### ★ 演題10 二織毛膜性の双胎一児死亡に関する検討

吉田啓治,又吉国雄,原譲,井槌慎一郎,柳下正人(東京医大・産婦人科)

二織毛膜性双胎では,一織毛膜性双胎に比べて周産期児死亡率や奇形発現の頻度が低く,通常,両児間の発育差も小さい。本学産院で出産した218組の双胎では,一織毛膜性双胎133組中,周産期児死亡は83例(31.2%),そのうち一児のみが死亡した組は33組(24.8%)であった。

一方,二織毛膜性双胎85組中,周産期児死亡は15例(8.8%)と少なく,一児のみ死亡した組は9組(10.6%)であった。9組中5組が妊娠中の一児死亡で,生存児の出生時体重平均は $2475\text{g} \pm 548\text{g}$ ,胎内死亡児の平均体重は $1055\text{g} \pm 929\text{g}$ で,主な死因としてはs. u. a.,胎盤母胎面全梗塞などがあり,原因不詳例もあった。生後一児が死亡した症例では,生児と死亡児間に体重差はなく,死因としてファロー四徴候

突発性胃穿孔，骨盤位の臍帯脱出などが考えられた。

一織毛膜性双児の一児死亡と比較検討し，その違いについて論じたい。

★ 演題11 子どもどうしの言葉によるコミュニケーションの発達  
——三つ子きょうだいの18～24ヶ月の観察より——

佐藤昌子（ツインマザースクラブ）

発表者自身の子どもである三つ子兄弟（三卵性，一男二女）の日常生活の観察より，初期の子どもどうしのコミュニケーションに言葉がとりこまれる過程について検討した。その結果は以下のものであった。

1. 母子関係の中で観察された初期の言葉は名詞が中心で，要求の対象を示したり，発見を伝えるなど，物を介したいいわゆる三項関係において使われることが多かった。一方，子どもどうしの間で言葉が使われ始めたのは「イヤ」「オイデ」など相手に行動を求める場面からであった。
2. 子どもどうしの初期のコミュニケーションに使われる言葉には，「アブナイヨ」「ナカナイデ」など大人が子どもにかかわる時にかける言葉が多くみられた。
3. 言葉が出る以前から同じ調子で交互に声をかけあう会話風の遊びがみられ，言葉が出てからも，情報や要求の伝達を目的としない言葉のかけあいが観察されている。

★ 演題12 母親による双生児の性格の認知Ⅱ——面接法を用いて——

平野直己（東京都立大・人文・心理）

一昨年(1989)の本研究会において発表した，双生児の性格の差異に関する母親の認知についての続報である。前回報告した質問紙に回答された母親から，①一卵性対間の差異を大きく捉えていたA群（4名） ②一卵性間の差異を小さく認知していたB群（3名） ③二卵性群（3名），以上3群10名について半構造化面接を行った。

卵性に関係なく，母親は対間に個性的性格差異が存在すると考えていたにもかかわらず，性格の具体的項目の調査によると卵性間の比較において一卵性にステレオタイプの傾向がみられたことを前回報告した。今回個別ケースを検討した結果，①一卵性の母親は日常経験する出来事の細かな対間の差異を挙げることはできるが，

具体的な性格と結びつくと思われる安定した反応の差異は挙げにくい。②母親一雙生児間の心理的距離がA群，B群で異なる，ことなどが示唆された。

### ★ 演題13 教授学習場面における双生児対間の学習過程の比較研究

安藤寿康（慶応大・文）

能力や性格などの心理学的形質の形成に及ぼす遺伝の影響について考える場合，遺伝子がどの程度それらの神経生理学的構造を決定しているかという視点（INS [Innate neurological structure] 理論）のみならず，なんらかの遺伝的規定を受けた神経生理学的構造を備えた個体が，その遺伝的規定によって，環境との間にどのようにその個体独自の相互作用を行い経験を構成していくかという視点（EPD [Experience-producing drive] 理論）が重要であると思われる．とくに教育的関心から遺伝について考える場合，興味深いのはEPD理論的視点であろう．

本研究ではEPD理論的視点に立ち，特定の教授学習場面において，双生児が異なる教授条件のもとで，どの程度類似した学習活動を行い，どのような能力を獲得するのかを比較しようと試みた．被験者は都内に住む小学5年生の一卵性7組（男子3組，女子4組），二卵性4組（男子2組，女子2組）であり，教授条件は20時間（2時間 × 10回）にわたる初等英語の異なる2つの教授法（コミュニケーション・アプローチと文法的アプローチ）である．授業は同学年の一般児童を含む9～13人のクラスで，異なる教師により集団式で行われた．分析は，筆記・面接等各種能力検査ならびに動機づけ検査の結果と，VTR録画による授業場面観察のデータをもとに行う．

最終筆記検査における一卵性，二卵性のそれぞれの級内相関係数は， $r_{MZ}=.65$ ， $r_{DZ}=.34$ であった．一卵性では仲間との関係の作り方，授業にのぞむ姿勢，課題に取り組むときの態度などに多くの類似性がみられ，成績も1組を除いて比較的類似していた．一方二卵性では授業内の諸態度に類似性を示す組でも，成績がかなり異なるケースが見られた．



## 第8回国際人類遺伝学会での双生児関連演題

1991年10月6日から10日にかけてアメリカのワシントンD. C. で開催された国際人類遺伝学会には、日本からも多数の参加者がありました。

この学会の中で双生児に関する演題は全部で31題ありました。これらの演題を抜粋し、Proceedings 番号と演題名を紹介しておきます。関心のある方は参考にして下さい。抄録が入用な方は、Proceedings 番号を書いてニュースレター発行所まで連絡下さい。

- 13 VARIATION IN EXPRESSION IN NFI: A TWIN STUDY
- 68 GENETIC AND ENVIRONMENTAL CONTRIBUTION TO COGNITIVE AGING AND SENILE DEMENTIA IN ADULT TWINS
- 399 LONGITUDINAL GENETIC ANALYSIS OF SAME AGED TWINS: HDL CHOLESTEROL
- 400 BIOLOGY AND GENETICS OF DIZYGOTIC TWINNING
- 401 TWIN STUDIES OF HUMAN OBESITY
- 402 THE CONTRIBUTION OF POPULATION-BASED TWIN REGISTRIES TO GENETIC EPIDEMIOLOGY
- 858 TWIN STUDY IN FAMILIAL MEDITERRANEAN FEVER (FMF) - A GENETIC DISORDER WITH MARKED VARIABILITY IN CLINICAL EXPRESSION
- 909 FIFTH MONTH FETAL-SIZE MARKERS IN SCHIZOPHRENIA: A DISCORDANT MZ TWIN STUDY
- 915 SCHISIS MALFORMATIONS AND TWINNING: A FAMILIAL ASSOCIATION
- 921 EFFECTS OF CHORION TYPE ON COGNITIVE AND PERSONALITY FACTORS IN YOUNG MONOZYGOTIC TWINS
- 943 HYPOTHESIS FOR THE PATHOGENESIS OF CONJOINED TWINS (CT)
- 1146 INCREASED RISK OF ANEUPLOIDY IN TWIN GESTATIONS SUPPORTS PRENATAL DIAGNOSIS AFTER AGE 30

- 1197 MID-TRIMESTER HCG & UE3 LEVELS IN TWIN GESTATIONS
- 1214 MSAFP SCREENING FOR OPEN NEURAL TUBE DEFECTS IN TWIN PREGNANCIES
- 1339 GENETIC SUSCEPTIBILITY TO BLEOMICYN: A STUDY IN TWINS
- 1484 THE SMALLEST KNOWN 2Q DELETION IDENTIFIED IN ONE MILDLY AFFECTED MALE TWIN
- 1485 FAILED PRENATAL DETECTION OF TRISOMY 8 MOSAICISM IN AN IDENTICAL TWIN PREGNANCY
- 1641 CYTOGENETIC AND MOLECULAR ANALYSIS OF A XQ ISOCHROMOSOME IN CHORIONIC VILLUS SAMPLING (CVS) AND FETAL TISSUE OF TWIN GESTATION
- 1833 MATERNAL SERUM ALPH-FETOPROTEIN AND HUMAN CHORIONIC GONADOTROPIN IN TWIN PREGNANCIES
- 2222 EXPRESSION OF THE MYOTONIC DYSTOPHY GENE IN MONOZYGOTIC TWINS
- 2231 OPPOSITE PATTERNS OF X INACTIVATION IN MZ TWINS DISCORDANT FOR RED-GREEN COLOR VISION DEFICIENCY
- 2644 SERUM IMMUNOGLOBULINS IN TWIN FAMILIES
- 2658 MIGRAINE HEADACHE IN VIRGINIAN AND NORWEGIAN TWINS
- 2666 RECURRENCE OF TWINNING AND FAMILIAL INCIDENCE OF TWINNING AMONG RELATIVES OF TRIPLETS AND QUADRUPLETS
- 2691 SERUM CHOLESTEROL LEVELS OF KOREAN TWINS
- 2693 BLOOD PRESSURE IN TWINS
- 2721 PHYSICAL GROWTH AND DEVELOPMENT OF HUMAN TWINS
- 2755 HERITABILITY OF RECALLED AGE AT MENOPAUSE: A TWIN STUDY
- 2759 GENETIC DETERMINANTS OF PLASMA HIGH DENSITY LIPOPROTEIN COMPOSITION - STUDIES WITH MONOZYGOTIC TWINS
- 2767 MULTIVARIATE GENETIC AND ENVIRONMENTAL ASSOCIATIONS AMONG MALE SEX-STEROID HORMONES AND DIETARY INTAKE COMPONENTS IN TWINS
- 2772 CORRELATIONS AMONG LIFESTYLES, SUBJECTIVE SOMATIC CONDITIONS AND MENTAL STATES SEEN IN TWINS

※※ 双生児研究会第6回学術講演会開催のお知らせ ※※

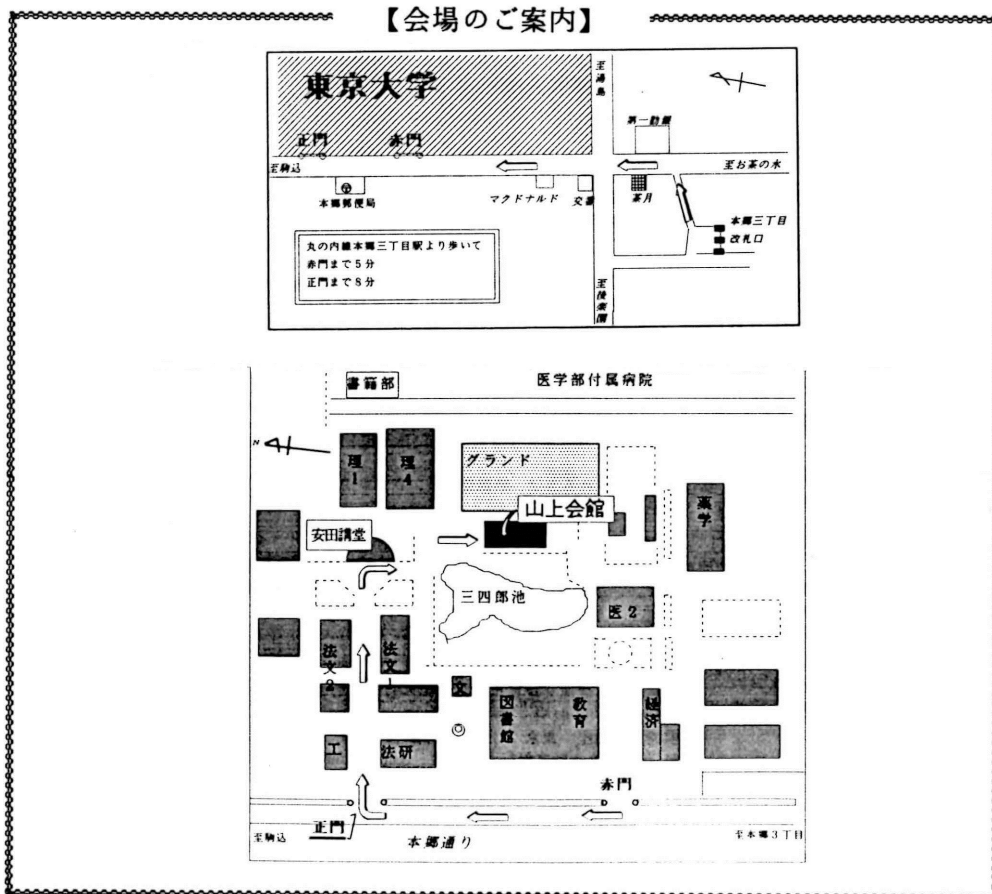
【日時】 平成4年1月25日(土) 午後1時-5時30分

【会場】 東京大学山上会館大会議室  
〒103 東京都文京区本郷7-3-1  
(地下鉄丸の内線本郷三丁目下車)  
なお、講演会終了後、談話ホールで懇親会を行います。

【特別講演】 「個人追跡法による双生児組内差の年齢変化の研究」  
保志 宏 先生(東京大学総合資料館医学部門)

【世話人】 山梨医科大学保健学Ⅱ講座 浅香昭雄  
電話 0552-73-1111 (内線 2300)  
0552-73-6729 (直通)  
FAX 0552-73-7882

【会場のご案内】



# 第6回 双生児研究会 学術講演会プログラム

- 1:00 開会の辞 浅香昭雄（世話人）
- 〈一般演題〉
- 1:05 座長 又吉國雄  
（東京医大・産婦人科）
- 演題1. 吸引分娩術にて解鈎し得た頭位一頭位型双胎の懸鈎例（Impaction）  
○内野鴻一（大森赤十字病院産婦人科）  
前田光士、田中政信、平川 舜、百瀬和夫  
（東邦大学医学部第1産婦人科）
- 演題2. 品胎11例 一胎盤からの観察  
吉田啓治、又吉國雄（東京医大産婦人科）
- 演題3. わが国における双生児の胎内発育曲線  
加藤則子（国立公衆衛生院）  
浅香昭雄（山梨医大）
- 1:41 座長 天羽幸子  
（ツインマザーズクラブ）
- 演題4. 青年期・青年期以降の双生児の人間関係に関する研究  
○蛭田かほり、永井好弘、阿久津勝利、天野洋子、  
平野和由、村石幸正、古谷昌子  
（東大・教育・附属中・高）  
詫摩武俊（東京国際大学）  
天羽幸子（ツインマザーズクラブ）
- 演題5. 双生児にみられる兄弟的性格  
天羽幸子（ツインマザーズクラブ）
- 演題6. 三つ子に見られる兄弟的性格  
佐藤昌子（ツインマザーズクラブ）
- 2:17 座長 南光進一郎  
（帝京大医・精神神経）
- 演題7. 教授学習場面における双生児対間の学習過程の比較研究（2）  
安藤寿康（慶応義塾大学文学部）
- 演題8. 一卵性双生児うつ病の不一致例  
—その家族状況を中心に—  
横山知行、飯田 眞（新潟大学医学部精神医学教室）

演題9. 躁うつ病の一卵性双生児の一致例

森平淳子、塚本 一、南光進一郎  
(帝京大学医学部精神神経科)

演題10. けいれん発作で受診した男性「自閉傾向」双生児一致例

武藤康剛(長崎大学医学部精神神経科学教室)  
岡崎祐士、藤丸浩輔、南 裕二、辻田高宏、中根允文、  
田川安浩(田川クリニック)

3:05

座長 早川和生  
(近畿大学医学部公衆衛生)

演題11. 双生児の口腔顔面領域における一致性の検討

菊地 白(帝京大学医学部口腔外科学教室)

演題12. 大規模な Population-based 双生児調査における再調査効率の検討

早川和生、清水忠彦、大城 治、三戸秀樹、由良晶子、  
藤形真美、横山美江(近畿大学医学部公衆衛生学)  
粟野玄佐武、高橋 茂(元・福島県立医大第一内科)  
天野孝八(福島県立環境医学研究所)  
寺門之隆(元・大阪市立大学医学部解剖学)

演題13. 双子老人における寿命と死因の比較

早川和生、清水忠彦、大城 治  
(近畿大学医学部公衆衛生)  
大場康寛(同上、臨床病理)  
富岡 茂(同上、中検)

演題14. 双生児の発育評価

大木秀一、木之下徹、大間敏美、飯島純夫、浅香昭雄  
(山梨医大・保健学II)

3:53 ●●●●●● 休憩 ●●●●●●

4:10 〈総会〉 座長 岡島道夫  
(東京医歯大名誉教授)

4:30 〈特別講演〉 座長 浅香昭雄  
(山梨医大)

演題 「個人追跡法による双生児組内差の年齢変化の研究」  
保志 宏 先生(東京大学総合資料館医学部門)

5:25 閉会の辞 飯田 眞(次年度世話人)

5:30~ 〈懇親会〉 会場: 談話ホール  
会費: 1,000円  
多数、ご参加下さい。

## 第6回 双生児研究会学術講演会抄録集

### 〈一般演題〉

一般演題の発表時間は発表・討論で12分を予定しています。できるだけ配付資料(50~100部)を用意して下さい。スライドプロジェクターは1台用意します。

### 演題1. 吸引分娩術にて解鈎し得た頭位一頭位型双胎の懸鈎例 (Impaction)

○内野鴻一 (大森赤十字病院産婦人科)

前田光士、田中政信、平川 舜、百瀬和夫  
(東邦大学医学部第1産婦人科)

双胎分娩時の合併症の中で、懸鈎は極めてまれであるが、分娩中に一端懸鈎を起こした場合は児の死亡率は極めて高い。しかし、その予知は非常に困難であり未だ予知法についての定説は無いとされている。

今回、われわれは頭位一頭位型の双胎妊娠39週5日の32歳の1回経産(男児、3590g,経膈分娩)が、陣痛発来にて入院し(先進児頭 St-2、子宮口3cm開大)、順調な陣痛と子宮口開大9.5cm、先進児頭 St+1 に至ってから続発性微弱陣痛に陥ったのでグットマン X 線撮影により骨盤入口上における懸鈎 (Impaction) と診断できる像、即ち、第1児の児頭の圧迫による第2児の児頭陥凹像が得られた。そこで、帝王切開の準備をしつつ吸引分娩を施術し、無事に仮死もなく解鈎して経膈分娩が出来た症例を経験したので、その詳細とわれわれの懸鈎予知法につき報告する。

### 演題2. 品胎11例 -胎盤からの観察(抄録未着)

吉田啓治、又吉國雄(東京医大産婦人科)

### 演題3. わが国における双生児の胎内発育曲線

加藤則子 (国立公衆衛生院)

浅香昭雄 (山梨医科大学)

不妊症治療の影響等もあってその出生割合が増加するなど注目を浴びている双胎について、全国データを用いて胎内発育曲線(妊娠週数別出生体重)の作成を試みた。人口動態出生票の昭和63年から平成2年までの出生分の磁気テープを用い、妊娠週数別の出生体重を集計し平均値等を横に結んで胎内発育曲線とした。ここでは、出生地が同一で出生日時之差が6時間以内のものを同一妊娠による双胎とみなした。磁気テープの出生体重の値は100g未滿切り捨てになっているため、これに50gを加えた値を集計した。男女別妊娠週数別出生体重と仁志田ら(1984)の単胎のそれを比較すると、34週までは男女とも150g程度小さく、その後差は大きくなり、42週では500g位に差が開いていた。男女差は単胎の場合と殆ど同じであった。初産経産別、出生順位別、同性・異性双生児別の計算結果も併せて報告する。

演題4. 青年期・青年期以降の双生児の人間関係に関する研究

○蛭田かほり、永井好弘、阿久津勝利、天野洋子、  
平野和由、村石幸正、古谷昌子  
(東大・教育・附属中・高)  
詫摩武俊 (東京国際大学)  
天羽幸子 (ツインマザーズクラブ)

昨年行なった東大附属の在校生の対人関係の調査に引き続き、今年度は特別な結びつきを持つ双生児の人間関係が青年期以降どのように変わっていくか、同校卒業生(大学生より50歳台の中・高年まで)を対象に調査した。

演題5. 双生児にみられる兄弟的性格

天羽幸子 (ツインマザーズクラブ)

双生児の対間にみられる性格の違いの中で、一般の兄弟にあてはまるような兄弟的性格差違が認められることが多い。従来の調査によって顕著にみられた20項目の兄弟的性格について、祖父母を含む家庭における兄弟的扱い、更に近隣・地域の扱いとの関連を調べた。

1. MZにおいては2歳の時点で兄弟的性格差違を示すものが多くみられる。2. A児に兄、姉的性格を認められるものが多い。3. 母親が兄弟的扱いをはっきりつけているものは極めて少ない。4. 家庭以外のまわりの人々から兄弟の別を聞かれることは、2歳児においても90%以上みられた。

演題6. 三つ子に見られる兄弟的性格(抄録未着)

佐藤昌子(ツインマザーズクラブ)

演題7. 教授学習場面における双生児対間の学習過程の比較研究(2)

安藤寿康(慶応義塾大学文学部)

本研究は昨年度本研究会にて発表した「教授学習場面における双生児対間の学習過程の比較研究(1)」を継続した実験の結果について報告するものである。本実験では1.学習結果だけでなく学習過程に及ぼす遺伝的影響を明らかにすること、ならびに2.異なる教授法の特質を明らかにすること、の2目的のために、4 MZと1 DZを異なる2つの英語教授法(Grammatical ApproachとCommunicative Approach)で約60時間教授した。観察の結果、MZは性質の異なる教授法にもかかわらず授業への関与の仕方が類似しており、学習成績も相対的に類似している。同時に、教授法や教師要因との相互作用も見出された。このことは、能力に及ぼす遺伝の影響の一部が、社会的相互作用の仕方を媒介としていることを示す。その他、意欲や英語学習に対するメタ認知についても言及する。

演題 8. 一卵性双生児うつ病の不一致例

—その家族状況を中心に—

横山知行、飯田 眞

(新潟大学医学部精神医学教室)

一卵性双生児は同じ遺伝子型をもつため、ある精神疾患の発症が双生児間に不一致である要因を比較することにより、病前性格—発病状況論、発達論、家族状況、社会文化的背景等の広義の環境因が疾患にはたす役割を検討することができる。

今回、我々はうつ病を中年期に発症した女性一卵性双生児を経験した。本症例の双生児間の環境要因を対比した際にみられたきわだった差は結婚後の家族状況であった。両者は、強力な母親の庇護のもとに育てられたが、うつ病発端者(B)は結婚によりこの庇護のもとを離れた。夫は自分勝手にまた酒に溺れては暴力を奮うという毎日で、患者の依存欲求はとうてい満たされることはなかった。一方、発病を免れた相手(A)は、家の跡取りとして婿を取り、結婚後も母親のもとにとどまった。この家は「ゴッドマザー」とでもいうべき母親のもとに秩序ある庇護的な環境が作られており、家族間の人間関係は良好であった。なお、双生児の病前性格は両者ともメランコリー型と考えられ、また心理検査所見も類似していた。

メランコリー型性格者は権威的庇護的な空間に包まれている時は安定しているが、この空間が危うくなったときにメランコリー型という生活史的に獲得された防衛機制が破綻し、うつ病がひきおこされると考えられる。我々はこのような視点のもと、本症例から、うつ病の発症に抑止的に働く環境因について家族という場を中心に考察したい。

演題 9. 躁うつ病の一卵性双生児の一致例 (抄録未着)

森平淳子、塚本 一、南光進一郎

(帝京大学医学部精神神経科)

演題10. けいれん発作で受診した男性「自閉傾向」双生児一致例 (抄録未着)

武藤康剛 (長崎大学医学部精神神経科学教室)

岡崎祐士、藤丸浩輔、南 裕二、辻田高宏、

中根允文、田川安浩 (田川クリニック)

演題11. 双生児の口腔顔面領域における一致性の検討

菊地 白 (帝京大学医学部口腔外科学教室)

双生児における口腔顔面領域の類似性診断では、この領域が、胎生期の原腸端に発生する左右の顔面突起の発育癒合によって形成され、遺伝的要因と妊娠中の諸条件や生後の環境要因により、種々の発育経過が認められることから、卵性診断上の意義とともに発育過程における類似性や疾患モデルとして極めて重要な意義を有している。東大附属中学において、演者が精査を行った双生児は1984年から1991年の間に111組に達している。その内で、男児双生児は39組、



女子双生児は64組、異性双生児は8組であり、一卵性双生児は87組であった。口腔顔面領域の精査の結果、一卵性双生児では、頭髮の一部白髪、眼球位の非対称、眼瞼脂肪腫、耳介委孔、副耳、鼻根部湾曲、顔面アトピー性皮膚炎などの一致が認められ、顎口腔領域では、顎劣成長、口蓋垂裂、高口蓋、口角委孔、粘膜小帯異常、地図状舌、歯列弓狭窄、咬合異常、歯冠形態異常、歯の萌出期などが一致した。

演題12. 大規模な Population-based 双生児調査における再調査効率の検討

早川和生、清水忠彦、大城 治、三戸秀樹、  
由良晶子、藤形真美、横山美江

(近畿大学医学部公衆衛生学)

栗野玄佐武、高橋 茂

(元・福島県立医大第一内科)

天野孝八 (福島県立環境医学研究所)

寺門之隆 (元・大阪市立大学医学部解剖学)

我が国の過去の双生児調査には、国際的にもすぐれた大規模調査が少ない。これら双生児調査例を再調査すれば、貴重な Follow-up Study へと発展することが期待できる。今回、我々は東北地区および大阪市において過去(20-35年前)に実施された大規模双生児調査に再調査を開始し、とりあえず郵送質問紙調査を実施した。効率的な再調査方法を求めるため回収率を検討した。

1. 福島県立医大の調査(対象:3,794組)

東北6県において栗野、高橋らを中心とするグループが昭和30年代-40年代に実施した双生児調査である。3,794組の双生児パネルのうち3,370組について再調査を試みた。3,370組の63.2%にあたる2,130組について電話帳を利用して現住所が同定でき、健康アンケートを郵送した。回収率は25.9%であった。回収率を性別に比較すると、男同士ペア25.8%、女同士ペア28.3%、男女ペア18.1%であった。ワインベルグの式を用いて卵性別の回収率を算定するとMZ 22.1%、DZ 33.1%であった。

2. 大阪市立大学の調査(対象:586組)

学童双生児を対象に、昭和29年から大阪市立大学医学部解剖学教室が実施した調査である。586組のうち当時の住所が保存されていた392組について再調査を試みた。392組の37.5%にあたる147組について現住所が同定でき、健康アンケートを郵送した。回収率は28.6%であった。回収率を性別に比較すると、男同士ペア30.0%、女同士ペア33.0%であった。卵性別回収率はMZ 27.6%、DZ 32.2%であった。

演題13. 双子老人における寿命と死因の比較

早川和生、清水忠彦、大城 治

(近畿大学医学部公衆衛生)

大場康寛 (同上、臨床病理)

富岡 茂 (同上、中検)

かねてより実施している追跡健康調査に協力を得ている中高年齢双生児1,752組のうち既に死亡した例（双方とも死亡23組、片方のみ死亡161組）の死亡年齢および死因疾患に関する成績を報告する。

双方とも死亡したペアにおける死亡年齢差は、一卵性ペア $6.65 \pm 5.6$ 年（最大差18.0年、最小差13日）、二卵性ペア $8.66 \pm 7.2$ 年（最大差18.9年、最小差2.9年）と、両卵性間で顕著な差異は見られなかった。

死亡疾患については、双方とも死亡したペアのうち同一の疾患で死亡したのは一卵性の2組（心筋梗塞1組、肺癌1組）のみであった。一卵性ペアでも死因一致率は低いものの、肺癌一致例は死亡年齢もほぼ一致し、心筋梗塞一致例は死亡に至るまでの症状経過が似ていた。死因については特定の疾患でのみ遺伝素因の関与が示唆された。

#### 演題14. 双生児の発育評価

大木秀一、木之下徹、大間敏美、飯島純夫、  
浅香昭雄（山梨医大・保健学II）

双生児の発育評価はこれまで単産児と区別することなく行われてきた。しかし、双生児が単産児と同じ発育経過をたどるか否かが考慮されないままであった。我々は、双生児の出生時から12歳時までの身長・体重の発育経過を分析することにより以下の結論を得た。1. 双生児の在胎週数別出生時平均体重は単産児とはかなり様相を異にするため、双生児用の発育基準値が用いられるべきである。2. 乳幼児期の発育に関しては、生後1年間で単産児との差が急速に縮まり、その後緩やかな回復を示し学齢期に至る。この傾向は出生時に遅れの大きかった体重に関して顕著である。3. 学齢期中頃には単産児との差はほぼ消失しており、特に単産児と区別することなく発育評価をしてよいと考えられる。

〈特別講演〉

「個人追跡法による双生児組差の年齢変化の研究」

保志 宏（東京大学総合資料館医学部門）

双生児の生体計測値について組内差を調べる場合、従来の研究は Verschuer の百分率偏差  $\text{percent deviation } 100 \times (A-B)/(A+B)$  に依頼して論じられてきた。しかし、他人同士の random な pair を作って百分率偏差の平均値を求めると、それぞれの計測値項目の変異係数にほぼ正比例し、百分率偏差の値は分散の大小に影響されることが明らかとなった。

そこで百分率偏差をそれぞれの項目の変異係数で除し、さらに正規分布に近付けるために平方根変換を施した値を「訂正百分率偏差」 revised percent deviation R P D と名付け、これを類似度の指標とすることにした。

R P D は各個人の個々の値について算出できるので、これを用いて、身長・体重・胸囲・座高の小1から高3まで12年間の双生児の組内類似度の年齢変化を固体別に調べた。その結果、A~Fの6型の年齢変化パターンを取り出すことが出来たので、これらについて、一卵性・二卵性、男性・女性などを比較検討した。

## 第7回国際双生児研究会議のお知らせ

The 7th International Congress on Twin Studies  
Tokyo, June 22-25, 1992

会期：1992年6月22日（月）－6月25日（木）  
会場：東京医科大学病院 東京都新宿区西新宿6-7-1  
主催：双生児研究会、（財）難病医学研究財団

本会議に関する問い合わせは下記の事務局までお願い致します。

第7回国際双生児研究会議事務局  
財団法人 日本学会事務センター 国際会議開催業務部内  
〒113 東京都文京区本郷3-23-1 クロセビア本郷2階  
電話：03-3817-5831  
FAX：03-3817-5836

双生児研究会会員の皆様には既に通知が御届きの事と思いますが上記の日程で第7回国際双生児研究会議が開催されます。

特別講演・シンポジウム・ポスターセッション・一般講演が予定されていますがシンポジウムのテーマは以下の通りです。

### シンポジウム

1. 多胎妊娠
2. ふたご出産率
3. ふたごの心理社会的側面
4. 心臓血管疾患
5. 知能、性格、精神医学
6. 薬物濫用
7. ふたごの行動発達の縦断的研究
8. 遺伝疫学
9. X染色体不活性化とふたごの類似性
10. 別々に育てられたふたごの研究
11. ふたご研究と法的問題
12. 成長と加齢
13. 精神疾患

## 関西ふたご研究会のお知らせ

平成4年・第1回集会のご案内

後援：大阪公衆衛生協会

会場：山西福祉記念会館

(大阪市北区神山町11番地、TEL:06-315-1868)

日時：平成4年2月1日(土)午後1:30-4:00

会費：無料(参加自由)

### プログラム

1. 講演 「母子保健の最近の話題と双生児の養育」  
加藤則子(国立公衆衛生院母子保健学部)
2. 講演 「双生児家庭における保健指導上の留意点」  
大岸弘子(尼崎市東保健所)
3. 自由討議

問い合わせ：関西ふたご研究会事務局

(近畿大学医学部公衆衛生学内)

電話：0723-66-0221 内線3272

[住所・所属変更]

[訂正] ニュースレター第9号の1990年度会計報告において、前年度繰越金170,663円が抜けていましたので訂正いたします。

編集後記

早いものでニュースレターも第10号になりました。今回のニュースレターは、今年の1月に行われた学術講演会の一般演題抄録及び来年1月に開催される第6回学術講演会のプログラムと抄録を掲載しました。

国際双生児研究会議の日程も決定いたしました。会員の皆様もご準備下さい。

1991年も残すところ後わずかになりました、よき新年をお迎え下さい。

[大木]

### ニュースレター発行所

〒409-38 山梨県中巨摩郡玉穂町下河東1110番地

山梨医科大学保健学Ⅱ講座

電話 0552-73-1111 (内線2300)

0552-73-6729 (直通)

FAX 0552-73-7882